

つかの戦を経て現在に至る

以上

## シベリア抑留者から

### 平和のため日・ロ両国民に訴える

新潟県 高橋 吉郎

昭和二十年八月九日の未明、ソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄して我が国日本に宣戦布告して来たのであるが、旧満州の黒河、虎林、ハライルの国境三方面から飛行機、戦車による空・陸二段がまえて怒涛の如く急襲して来たのである。僅かな兵力しかなかった関東軍は、兵器も弾薬も乏しく急襲して来たソ連軍に立ち向かおうとしても力の比ではなかった。しかし決死隊をもって激しく抗戦したのである。各所に激戦が展開され、特に国境付近においては双方とも多数の戦死者を出したのである。優勢なソ連軍は忽ち国境を突破し、新京・奉天などの主要都市に迫り、ソ連軍の威

力は日本の残留関東軍に対しては赤子の手をねじるが如くであり、優勢な攻撃で襲いかかり全満州を忽ち占領してしまったのである。空き巣狙い同然の戦闘であり、在留日本人の惨状は悲惨を極めたのである。在留邦人は避難するいとまもなく、不意のソ連軍の侵入により一般家庭にまでソ連軍が自動小銃を携えて入り込み、殺戮、強奪、強姦など凶悪の限りをつくしたのである。

私は昭和十八年十月五日、会津若松東部二十四部隊に召集により入隊した。それまでは新潟県巡査を拝命し、教習所を卒業して新任一年二カ月の外勤勤務中から入隊したものであった。シベリアに抑留中、特高ではないかとソ連軍の将校から取調べを受けたが、そうではないと答えた後それ以後は追及されなかった。しかしシベリア抑留中は殆ど作業隊の責任者をやらされてソ連軍に信頼されたのか、ビスカノボーイ（ソ連の歩哨がつかない）で収容所を出発する際サインをして作業に出て行き、誠実にソ連軍の指示に従い、いつも

ノルマ百パーセント達成に努力をした。又隊員の健康や事故の防止に万全の注意を常に念頭に置き、自分は独身である、出征して国家に命を捧げた体であると同時に率先して活躍したことから、ソ連側へも受けが良かったし、上官であった友軍の幹部達にも受けが良かった。これは手前味噌のようであるが、自分でも不思議に思った。

軍隊に入隊してから、巡査であったことから特に目をつけられ、初年兵教育中もまた特に厳しかった。従って他の戦友より多くビンタをもらい、出発点から軍隊は嫌な所であったので積極的にはなれなかった。しかし終戦となり抑留される身分となつてから、他の戦友は力を落とし魂が抜けたような虚脱状態になっていたが、自分だけは何か憑き物が落ちたようにきりきりと活動したのであった。このようなことから、地獄の苦しみと言われた収容所へ入所した昭和二十年十一月中旬頃からの、極寒零下三十度から四十度にもなる屋外で空腹をかかえての穴掘り作業に耐え抜いて、翌年の春五月頃からソ連人の測量士の助けに出ることに

なり、ソ連の地方人のもとで働き、恵まれた作業につくことが出来たばかりでなく、半年間のソ連人との接触で片言まじりのロシア語も通じるようになったのである。この事が幸いしてビスカノボーイの作業隊の責任者となつて作業に出ることになったのであるが、この作業隊が又大変な重労働の難作業であつたのである。シベリアに抑留されてあのような命がけの難作業はなかつた。まかり間違えば銃殺か終生帰ることの出来ない冒険をやつてのけたので、自分でも終生忘れることは出来ないのである。

シベリアの大森林は切つても切つても尽きることはないと言うが、この大森林の伐採で、抑留日本兵がシベリアの大森林の奥地へ連行され空腹をかかえて重労働をさせられた。空腹は食料を横流しされたことによるものだ。また、悪環境から風の媒介による発疹チブスの伝染病で多くの尊い人命が失なわれたことは、辛うじて生き抜いて祖国へ帰つた戦友の苦闘の語り伝えとなつて今日に至っているものであるが、この筆舌に尽くし得ぬ苦闘の結果、切り出された材木を製材する

工場の作業隊の責任者となって出たことである。作業員十五人程で、一日のノルマは長さ六・五メートル、木口三十センチメートルの丸太三十五本を製材しなければならぬのである。これが百パーセントで、これによって食料が支給されるのである。重労働であるので、最低百二十五パーセントあげないとこの重労働は勤まらないのである。大量のオガクズが出るので二メートルもある高台に太い丸太三十五本を上げるのはとても至難の業であり、日を追うに従って隊員は体力の減退が目立って来た。顔青ざめ、目は窪み、頬はこけて来るのが目立って来た。骨を削られるような辛さである。

これでは早晚倒れる者が出て来ると考えた末、緊急避難の措置として集団窃盗を考えた。それは、工場の隣の貨車積みになって止まっている上質のカイ炭である石炭に目を付けた。火力発電所に使うカイ炭である。この石炭を夜間作業となった時に、歩哨の疲れを幸いとして深夜の休憩の時間に集団窃盗することを考えた。隊員の反対もあったが俺が責任を取ると言っ

賛成してもらい敢行した。石炭の貨車の前後には銃を持った地方人の歩哨がついていたが運よくみつからず、隊員で手送りして相当量のカイ炭をオガクズの中に隠匿した。第一段階は成功した。日を置いて屈強の体格のがっちりした隊員が、二キロメートル離れた高い丘を越えて石炭を南京袋に詰めてかついで行き相当量のジャガ芋と交換して来た。このあと毎晩深夜の休憩時間に飯盒でゆでて食した。この夜食のおかげで隊員の体力も回復し、したがって百パーセントのノルマを達成することが出来て、更に百二十五パーセントにまで上げることが出来たのである。天佑神助とも言ふべきであった。

抑留されて二年目の冬にこのような難作業の責任者として事故もなく過ぎ、再びシベリアの春を迎えた。トラックに一時間も乗る工場に行つて煉瓦の積み込みの単純な作業をやつて、愈々三度目の極寒の冬を迎える頃の秋も深まる十月頃であったか、イルクーツク市内にある大規模な火力発電所の作業に行くことになった。遠くからも見える大きな煙突が五メートルも天を

突いて立っていたが、人口六十万というイルクーツク市の電力をまかなうだけに、これに使用する石炭も相当なもので、終始トラック数台で入れかわり運搬されてくる石炭をトラックからおろす作業であった。これは深さ二メートル、幅五メートル程の貯炭槽にトラックから石炭を投げ込むようにおろす作業で、石炭はクレーンで巻き上げられるのであるが、そのクレーンの補助作業などで、これも単純な作業であったが、極寒の屋外作業でトラックを順調に送り迎えるのはなかなか容易な作業ではなかった。昼夜二交代、一交代三十人程の作業で、夜間作業が終わると翌朝の七時頃になるのであった。疲れたうえに空腹で、これにも耐えて送り車のトラックを待つのは大変であった。しかし隊員はじっと我慢して誰一人苦情を言う者もいなかった。

今こうして記述して半世紀前のことを追想して、よく我々日本軍は、不法に抑留されながらじっと耐えて暴動を起こす者もなく、いずれの地域においてもソ連軍の指示に従ってあれ程の苦闘屈辱に耐えて来たもの

だと、自分乍ら日本人の偉大さに感心させられている。これも天皇陛下の終戦における玉首の賜と思わざるを得ない。度々記述するところであるが、天皇陛下の「耐えがたきを耐え忍びがたきを忍び」と命ぜられた玉音を忠実に守ったのはシベリアの抑留者であると言うべきである。それも、戦争と同時に召集が解除され祖国へ帰還すべきものを抑留したソ連の取った措置は、歴史上からも忘れ去られてはならないと思うものである。やはり日本人は大和魂で育てられ、武士道を貫き、シベリア抑留者は立派に天皇陛下の命を遵守したことは、歴史上でも高く評価すべきであると思うものである。シベリア抑留者に対して「シベリアの捕虜」と言われていることは、シベリア抑留者の名誉を棄損し人格を冒瀆するものである。

昭和二十三年四月頃、火力発電所の作業から、収容所は丘の上にあったが丘の下には年間三万台を生産するといわれる自動車工場の建設工事が行われており、鉄柱が立ち並んでおり煉瓦積みが行われていたが、その作業に行くことになった。もう抑留二年半程になっ

ており、共産主義者運動も始まっていった。同調しない者は反動と呼ばれていた。これと同時にダモイの話も出ており、既に病弱者は帰還したということも伝えられて来た。その頃既に憲兵・警察官は反動とされていったようであった。いろいろの噂が飛んだ。ハラショーラポーター（良く働いた者）は帰れるとか、反動を摘発した者は帰してやるとか、收容所の中も騒然として来た。日曜日になると自己批判などということが言われ、自己反省する者も出て来た。総て、良く思われてダモイの名簿に載せて貰うためである。

その頃筆者は政治部将校に、これはソ連の将校か通訳付きであったが、呼ばれて取調べを受けたのである。收容された当時身上書の提出があったが、分隊長の憲兵准尉の篠原さんに、入隊前警察官であったことを書かずに農業と書いておいたほうが良いと言われてその通り書いて出しておいたことが、同年兵の反動摘発に遭って警察官がばれてしまったものとわかり、特高という疑いを持たれたようであった。今迄作業責任者として作業に出ているものが、收容所から見える自

動車生産工場建設現場の作業に移り、一般作業隊員として働くことになった。自分では気にもとめてなかったものがいろいろと思ひ当たるふしがあった。警察官であったことが解った以上逃げも隠れもしない、好きないようにしたがよい、どうせ独身で身軽な体である、どうにでもしてくれと、只黙々と指示通り働いた。農業で鍛えた体であり、もう石の上にも三年になろうとしている。どうせ独身である、殺すも生かすも勝手にしてくれと度胸もついて来た。

案の定、夏も過ぎ九月に入るとダモイの話も現実的となつて来たが、誰よりも先にダモイの名簿に載るものと思つていたことが裏目に出してしまった。これまでの人生では何時も良い事が向いて来たと思うとこれが逆行して起伏の人生であったが、シベリア抑留という地獄の道に落ちて他と比べて恵まれた道であった。男盛りの三十歳である。人生はまだまだこれからである、度胸を決めた。ハラショーラポーターと言われた戦友は、ダモイの名簿に載つて天にも昇らん喜びであった。何時どうなるか身の保障はない、殺すも生か

すもソ連次第である、毎日が不安の年月であったのである、それが祖国に帰れるのだ。やがて出発の日が来て彼等は喜び勇んで収容所の門を出た。必ず帰れるから頑張つて体に気をつけてなあ、と後ろを振り返り乍ら手を振って涙をためて別れを惜しんだ。遠く見えなくなるまで見送った。ダモイの戦友が帰つた後の収容所はがらんとして、心に風穴があいたような空しさが湧いて来て、何とも言われない淋しさであった。

愈々シベリアの極寒の冬がやって来る。灰色の空から冷たい雨が降つて来た。取り残された者は二、三日して更に奥地のチェレンホーボの炭坑に送られたのであった。憲兵と警察官だけの作業隊となつて、鉄道線路に連結される自動式発電機械を格納する建物の基礎工事で、穴掘り作業をやらされた。シベリアはもう地下一メートルは鉄より固く凍結している。その穴掘りのノルマは、一メートル四方で深さ一メートルを掘るのが百パーセントであった。三年前収容された当時、長さ一・五メートル、直径三センチメートル程のロームという鉄棒を、凍結した土に打ち落として掘る作業

を極寒零下三十度から四十度にもなる屋外でやらされた地獄の苦しみを思い出し乍ら、今度は石の上にも三年で考えた。シベリアには冬期間牛に食わせる乾草が至る所に積み重ねてニオにしてある。もう逃げも隠れもしないと思つているのかソ連軍の歩哨も付いて来ない。作業場は収容所から三キロメートル離れた所にあるので各個バラバラに作業場に向かう。道すがら乾草のニオから枯れ草を一抱えして行き、作業現場に着くと、これを火種として付近に散らばっている丸太切れなどを拾い集めて焚き火を作るのである。作業にかかると頃になるとこれが燃えて凍結した土が三十センチメートル程柔らかくなり、太陽が出るに従つて穴掘りも深さ一メートル位掘れて、百パーセントのノルマが出来るのであった。

憲兵、警察官は反動として共産主義者には教育してもなれないと思つたのか一般の隊員とは別個の作業隊であったので、重労働をやらされるものと覚悟をきめて三年目の冬は越せないかも知れないと思つていたが、どうやら越すことが出来た。しかし転覆事故の危

険にさらされてはらはらさせられたこともあった。それは、基礎工事に使う割石を採取する現場への行き帰りにトラックに乗車して斜面の道を通過することであった。二台分の人員を一台で済ませようとして、全員を荷台に立たせて危険な斜面を突っ走るのであった。幾度かはらはらさせられたが、幸い転覆という事故もなかった。コンクリートに使う砂取り場にはロシア人の女子労働者も来ていたが、彼女達は男子の労働者と変わらぬ働き振りで、ソ連では当時男女同格であったようである。

三年目の極寒の冬も無事に越し、シベリアの野に陽春がやって来た五月下旬、佐官級の高級将校が収容所にやって来て我々を集めて「諸君は尊い経験をした。ソ同盟の労働学校を卒業した」と訓示をした。戦友は「おいダモイだ」と喜んでいたが、幾度かだまされ通してだったので、内心ダモイとは思っていなかった。間もなく移動することになった。

昭和二十四年六月中旬頃であった。チェレンホーボからウラジオストク方面に向かって移動し、懐かしい

思い出の街、三年間過ごしたイルクーツクを過ぎ、バイカル湖畔を通る。透明度は世界一というだけに、透き通るような水深に魚が泳いでいるのが見える。陽春の光が湖面に反映しキラキラと光って見える。海のようないなバイカル湖である。片側は岩石の切り立った山で、岩間をくぐり抜けて流れ落ちる岩清水、岩間に咲き乱れる株となつて点々と咲いているナデシコ。その山裾に赤いとんがり屋根の洋式の住家、その前で民族衣装を着たロシア婦人が洗濯をしている姿は、恰も一幅の名画を見るようであった。バイカル湖を過ぎると、今度はウラル山脈であらう雲つくばかりの高い山々が連なり、紫色に映えて実に美しい。大陸の大自然を見る旅そのものであった。

シベリアに抑留された時、同じこの鉄道で灰色の空のもと、既に初冬を迎えた極寒のシベリアそのものの地獄に引き込まれるような憂鬱な気持ちであったが、今この鉄道の旅は、祖国へ向かっていると思うとはおぼのとした希望が湧いて来るのであった。満州の春も赤や黄色、紫の花々が群生して一面七色のジュウタン

を敷き詰めたような鮮やかさであった。シベリアでも黄色の小菊のような花が沿線どこまでも咲き乱れているかと思惚れていると、今度は白一色の花に代わり、これがどこまでも続くのである。人間の手によらない天然の花園を見ることが出来た。これが長い抑留の報酬のような感じがして、このまま戦友が言うように帰国の旅であってくれたらと淡い希望を抱きながら、内心、どうして僅か二年二カ月の警察官であった者を、シベリアに抑留されてからは前述したように全力を尽くして戦友の先に立って積極的に働いたにも拘らず反動のレットテルを貼られて、同年兵であった戦友よりも八カ月も長く抑留されて何時帰れるか解らないのであるかと思うと、暗い気持ちになるのであった。

列車は間もなくシベリア第二の都市であろう軍都ハバロフスクに到着した。そしてライチハという炭坑の収容所に収容されたのである。既に七月に入らんとしていた。収容された当時は比較的清潔な気分の良い収容所に見えたが、建物は古く見えた。入浴場や食堂なども完備されており、売店などまであって、こんな収

容所もあったのかと思う程イルクーツクやチェレンホーボでの収容所とは格段の差であった。食事なども各人が食堂に行き、音楽を聞きながら炊事係から食器に受けたものを机の上に置き、椅子に腰をかけて食事をするというモダンなやり方であった。また、各人の占める面積は今迄の収容所のように畳一枚に二人という狭苦しいことでなく、畳一枚に一人というゆつたりとした場所に起居するという、我々の軍隊当時を思わせる程のゆとりがあった。ただ閉口したことは南京虫の襲撃があったことで、睡眠不足が四、五日続いたが、これも解消された。このような環境の中では、軍隊生活と変わりが無いようであった。最初から収容されてハラシヨラポーターで帰った者は、共產主義教育をされて、ソ連とは失業のない搾取なき自由な国と教えられて帰ったことであろう。我々が収容されたのは六月末頃であり、作業は地方人の住む一般住居の改修工事で、主として古くなった床を新しい板に張り替える作業であった。日本の八畳程の部屋二つの簡易な住居が立ち並んでいた。この作業もやはり憲兵と警察



官の前歴者だけの作業隊でやっていた。

約一カ月程して下痢が続き、ソ連では熱が出ないこと休ませないのであるが、どうした訳か入院ということになった。伝染病の疑いでもあったのだろうと思つて入院したところ、病室は清潔で感じがよく、寝台も立派なものであった。寝台の枕元には日本語に印刷された分厚い唯物史観やソビエト人民の歩んできた道と題する書籍が並べられ、これを見るようにと置いてあった。これらのことについては共産主義国にいたので無関心ではないが、イルクーツクにいた当時、東京帝大の法学士である偉い人と枕を並べて起居していたことから常にマルクス主義などのことを教えられていたことで、別に見る気もしなかった。これまでの收容所とは格段の扱いに、狐につままれたような気がする毎日であった。

約一カ月の入院生活を終えて、秋風の立つ九月に入る頃退院した。今度はあちこちから集められた寄せ集まりの作業隊で作業に出ることになったが、誰も作業責任者になる者はなかった。皆尻込みしていた。筆者

は、よし俺が引き受けた、と名乗り出た。今迄に幾度か作業責任者をやって来ており、どうせ誰かがやらなければならぬのだ、皆ダメイに差し障りがあると思つているのだろう。よし、最後の責任者となるだろう、失敗して帰れなくなってもこれも運命だ、と覚悟を決めて作業に出ることになった。作業は水道管布設工事であった。作業内容についてはこれまでも記述したことから省略するが、この作業におけるソ連のマッセル（監督）が親日的な良い人物で、筆者がマッセルに「我々日本軍はソ連の一方的のやり方でこうして抑留されている。我々の心の中では決してソ連を良く思っている者はいない。恐らくこれが最後の作業と思う。今迄ソ連の地方の人達は我々に対して常に同情の目で見られて親切であった。どうして戦争をしななければならないのか。再び戦争をしてはならない」と語つたら、マッセルはブライナー、ブライナーと言つていた。この頃、他の作業隊が作業から帰る際、北朝鮮がソ連軍を讃える歌として我々の戦友が歌い乍ら作業から帰って来たが、その文句は、

自由を愛するソビエト軍隊は

祖国の危機をくぐり抜いて

ファシストやからを叩きつぶし

世界の民族解放の主

レーニンの友スターリンの

率い導くソビエト軍は

永久に幸あれ、栄えあれ

このような軍隊がなぜあのような残酷な凶悪な行為をしたのか、自由解放すべきソ連軍が、なぜ終戦により祖国へ帰すべき日本軍を極寒のシベリアに抑留し、自動小銃を携え強制労働を監視しなければならなかったのか、理解に苦しむのである。明治三十七、八年の日露戦争のように正々堂々と正面切つての戦いで勝利をおさめたのではなく、不可侵条約を一方的に破り、不意打ちの裏切り行為をして勝者となっているソ連軍を讃える歌をなぜ敗者たる日本軍が歌わなければならぬのか。まさに踏んだり蹴ったりであった。

かくして、三カ月にわたる水道管布設工事も上位の成績をあげ、昭和二十四年十一月下旬、帰還者の名簿

に載ることが出来たのである。実に抑留四年三カ月の歳月であった。

同年十二月四日に舞鶴に上陸したのであるが、昭和十八年十月五日召集入隊してから満六年二カ月、国家のために奉公した事になったが、幸い五体満足で祖国に帰還することが出来たことを喜びとしなければならぬ。

筆者の生家である集落から出征して戦死せる者は、六十六世帯から十二人であった。筆者が舞鶴へ上陸して帰還者名簿を見たところ、自分の氏名の頭に赤丸がついていた。これは日の丸組の密告によるものと思われた。赤旗組と日の丸組とは、帰還船の中で要求貫徹と称して上陸拒否をしていた赤旗組と日の丸組とで見の対立からもみあい、日の丸組はさっさと単独行動をして上陸してしまつたのである。彼等の中のだれかが、作業責任者をやつていた筆者を共産主義者として引揚援護局の係官に密告したと見受けられた。筆者は日の丸組でも赤旗組でもなく、中立的立場に立つており、援護局の指示に従つて上陸したのであった。赤丸

がついていたのは責任的立場にあった者として印がついているのだろうと別に気にもしていなかった。ところが帰還列車の中で、あとで分かったのであるが、筆者に隣席して監視の警察官が私服で同席していた。留中は作業責任者であったからであろうと思っていた。

足掛け七年も軍隊、シベリア抑留と国家の為に奉公したことで、村の人達も出征する際のように大勢出迎えて来てくれて、全く有り難いことだと感謝した。生家の門をくぐり、今帰ったと老婆となった母親の胸に手をやると、親戚や村人達は皆涙を流して喜んでくれた。一カ月程生家で休養を取って親戚などに挨拶まわりをして、復職の手続きなどで県庁に出頭したところ、いきなり、良い所があったらそっちへ行つて欲しいと言われたことで啞然とするばかりであった。これはどうしたことかと思つたが、頭を下げてよろしくお願ひしますと言つて復職をお願いした。その時、これはやはり舞鶴で上陸者名簿の頭に赤丸がついていたので共產主義者と見られていたと直感し、これは復職し

ても監視されるであろうと思つていた。同僚や先輩達は長年の苦勞をねぎらつて親切であつたが、しかし上司は赤丸のことを問題視しているようで、注意人物と見ているようであつた。

経験不足から些細なことで失敗し、これを大きく取り上げられ責任を取らされた。もっとも、長い間抑留されて自由を拘束されていたものが解放され自由の身となつたことと、世間を甘く見ていたことに起因したものであつた。上司は、この際退職してくれた方が良くと思つているようであつた。祖国の風は冷たい、これから先が案じられると思つた。案の定、同僚達は条件の良い任務についたが、自分は失敗したことから条件の悪い勤務につかされた。下積みの雑務ばかりが多く、兼務を命ぜられ疲勞が重なり大変であつた。長い間の苦闘のあとに再び過勞が重なつたため、視力が著しく減退してしまつた。しかし体力はさほどでなかつたので辛うじて勤務することが出来たが、今度は胸部疾患になつてしまつた。体がだるく仕事する気力がなくなり、寝汗が出て嫌な毎日が続いた。この時はもう

駄目かと観念した。しかし、長女・長男が幼少で、こ

こで命を落としたらこの子等はどうなると、齒を食いしばって病氣と闘った。幸い、当時良い薬や注射が出てきて病氣を克服し、健康を取り戻すことが出来た。

これらは総て、長い抑留生活の過労から無理のきかない体になっていったものと思われた。戦争に行かなかつた者や戦争に行っても終戦と同時に帰って来た者はそれぞれ幹部に昇進して管理職となり、同期や後輩であり乍ら監督者となった者に説教され頭を下げなければならなかった。足掛け七年も国家の為に奉公しても何の恩典も受けられず、只復職するだけであった。しかもシベリア抑留者に再就職の道もせまく、自分などはまだ良い方であったかも知れないが、いつも心の中には不満が内在していた。

それにしても、シベリア抑留中に他界された戦友は全く気の毒であり、深く御冥福を祈念する次第である。辛うじて祖国へ帰っても、すぐ他界された戦友もまた計り知れないのである。これらの戦友の方々の御冥福を祈念するものである。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正七年一月二十四日

出生地 新潟県中魚沼郡川治村

学歴 村立川治尋常高等小学校高等科卒業

職歴 昭和十七年五月一日、新潟県巡查拜命

入隊 昭和十八年十月五日、召集令状により会

津若松東部二十四部隊入隊

軍歴 右部隊入隊し、同月二十二日、満州東安

第一三八七部隊転属

終戦時昭和二十年八月、満州四平衝

昭和二十年十月三十一日、黒竜江を渡り

ソ連ブラゴエシチェンスクへ入ソ

昭和二十年十一月、イルクーツク第六収

容所入所

昭和二十三年秋、チェレンホーボに移送

され、翌二十四年五月と記憶している

がハバロフスクへ移送

同年十一月末日、ナホトカに移送

同年十二月、四日栄豊丸にて舞鶴に上陸

帰国

抑留中作業 測量の助手、製材工場、煉瓦工場、建

築、水道工事、自動車工場の建設など

に従事

帰国後 昭和二十四年十二月二十日頃、警察官に

復職

昭和五十年三月三十一日付をもって円満

退職

(新潟県 中村 甲)

## 私の青春と抑留記

新潟県 松井 徹

まず、この手記を書く前にお断りしておくことは、すでに数版発行された『平和の礎』の中で、抑留者の方々のシベリアでの労苦、重労働、加えて食糧不足等々、収容所により大同小異、ほとんど語り尽くされていると思われるので、その点は大部分を省略して、角度を変えた視点から拙文をまとめてみました。

私は昭和十六年六月、徴用令により舞鶴海軍工廠造船部に配属された。ここは駆逐艦の新造を主として、加えて修理といった工場だった。その中で新造船に係わる事務部だったので、関係機関から来る新造艦の製造命令は全部手にとるように分かる部署で、当時とすれば極秘中の極秘だった。

新造船が完成すると日の丸の旗で進水を祝い、艤装工事が終わると船影はなく、多分南方に向かったのかなと想像していた。

二、三カ月たって、横腹にコンクリートで応急修理してドックに入っていた姿を見ては、事の悪化を自分なりに想像していた一時代だった。

昭和十七年十二月二十五日、徴用が解除されるや、十八年一月十日、現役にて千葉県市川市国府台野戦重砲兵第一〇一三部隊に入隊。一期検閲(三カ月間)の教育を受け、終わると即満州牡丹江省石門子に配属される。その時点ではすでに戦運悪化して、本隊の待つニューギニアに行く予定が海上封鎖され、陸路輸送も寸断され、石門子に待機中に「本隊玉粹」との悲報を